



成就是、次の冒険の始まり。彼は魚を追って、走り続ける。

「…来た」
 つい今しがた、目の前で仲間がメーターオーバーを
 バラすのを見ていた。
 心の準備は、できていた方なのかもしれない。
 突然のあたり即座にアワセを入れた。
 ほとんどフルに締めてあるドラッグが、切れ目のない
 悲鳴を上げ始める。
 相手は暗い水の中、その力を誇示するように疾走
 を始めた。

「上流へ走って！見守ってくれている仲間の一人が
 叫んだ。相手は、ストラクチャーへと向かっている。
 上流へ移動し、角度を稼いでラインブレイクを防
 ぐのだ。彼は泣き叫ぶドラッグと出ていくラインを
 確認しながら走った。すると、相手は向きを変え
 てこちらへと追ってきた。
 ここぞとばかりリリーングでたぐり寄せると、相
 手はまた沖へと逃げる。
 綱引きのようなファイトを繰り返した。
 そして相手は、ついに水面を割る。
 「アカメだっ！」

周りにいた仲間全員が声をそろえて叫んだ。
 相手の姿を目にしたとき、彼の胸には意外な思い
 がよぎっていた。
 「このサイズなら、獲れそうだ……」
 針を伸ばされ、ロッドをへシ折られ、その異様な魚
 体を目の前に何度も見せつけられてきた。
 これまでアカメを長年追い続けて尚叶わなかった
 アングラーにとって、それは心の底から漏れた吐き
 だった。
 彼は、ついに手にする初めての釣果を目の前にし
 て、安堵を覚えていたのだ。

しかし相手は猛き魚、アカメである。緊張感の
 あるファイトは尚も続いた。
 背後には、自分のロッドすら放り出し、彼の釣果
 を待つ仲間たちが固唾をのんで見守っていた。

…やがて仲間が差し出したネットに、無事アカ
 メが獲りこまれた。
 70cm。アカメにしては、大きなサイズではないのか

もしれない。
 でも、彼を知るその場にいた皆にとってそんなこ
 とはいつでもよかった。仲間たちは、喜びの叫び声
 をあげて彼の肩を抱いた。

2012年5月、このとき小林厚治というアング
 ラーの、20年越しの夢が実現となった。

小林厚治というアングラーがいる。
 imaテスター、フィッシングチームTokyo Sea
 Paradise代表。

シーバスフィッシング黎明期よりロッドを振り続
 け、西に東に奔走し、多くの仲間の人々と魚との
 出会いを届け、プロアマ問わず多くのアングラーか
 ら「アニキ」と慕われている、往年のアングラーだ。
 往年とはいっても、彼の釣りは終わってない。
 彼を重鎮と呼ぶにはまだ早いのかもしれない。
 アングラーとして、若者顔負けのバリバリの現役
 なのだ。

CM制作会社のプロデューサーという多忙な職
 業にありながら連日関東圏の海や川へと通い、しば
 しば他県への遠征にも出かける。
 週末に飛行機で釣りに出かけ、月曜日に羽田から
 直接出社することも珍しくない。

そして釣り場では、フィールドをよく知る地元
 の釣り仲間が彼を迎える。
 ロッドとルアーがすぐそばにある生活を、多くの
 仲間を支えられながら彼は何十年も「心底楽し
 みながら」続けてきた。

小林厚治は、多くの人が思い描く「釣りのある
 良き人生」を具現化した稀有なアングラーの一人
 であるのかもしれない。
 釣りとは人生。そのテーマを語るべき、だれもが思い
 浮かべるアングラーである。

そんな彼の「スタイル」は、一人の男の出現によっ
 て始まることになる。
 時は30数年前にさかのぼる。
 それが夜の釣り場にジャガーに乗って現れた、一風
 変わったアングラー、西村雅裕氏との出会いだった。



2012年、小林厚治は3尾のアカメを手に入れている。一尾目は本文にある5月の70cm。次いで10月、ECLIPSE・ヒデ林氏のサポートによる87cm。ヒデ林氏とは旧知の仲で、かつて干潟の釣りで毎夜同行するメンバーの内のひとりだった。この日は約10年ぶりに一緒に竿を振るう機会に恵まれた。最後に12月、後述のimaテスター・西村好仁氏と共にグレイゴースト号で挑んだ124cmである。2012年は、彼にとって忘れられない一年となったはずだ。

小林厚治にとって2尾目となった87cmのアカメ。この時すぐそばで釣りをしていたヒデ林氏は、自身の取材中だったのにも関わらず、ロッドを置いてランディングに手を貸したという。